

災害制御可能感はどこからくるのか

東洋大学大学院 学生会員 ○藤野 天樹
東洋大学理工学部 正会員 及川 康

1. はじめに

災害への備えに関する住民の主体性の醸成を阻害する要因のひとつに【災害制御可能感（対策を強化すれば災害を完全に防ぎ得るという過信）】の存在が指摘されている。片田（2020）¹⁾は、日本の防災に必要とされる根源的な論点のひとつとしてこの【災害制御可能感】の「払拭」を強調する。及川（2023a）²⁾は、強い【災害制御可能感】を抱く住民ほど、自身で主体的に防災対策に取り組む姿勢（【自身】と呼称）が希薄となり、同時に、防災行政などの他者への依存意識（【他者】と呼称）が高まってしまふ関係性を「懸念ロジック」と呼称しつつ、定量的な検証を加えている。しかし、この【災害制御可能感】がどのような要因によってもたらされるのかについて、及川（2023a）²⁾はひとつの仮説の提示にとどまっており、追加の検証が待たれるところである。本稿の目的は、この仮説に関する検証を、前述の「懸念ロジック」も併せて総合的に加えることである。

2. 災害制御可能感はどこからくるのか

及川（2023a）²⁾の見立てによると、過度な【災害制御可能感】の背後には「操作対象としての自然（主体（自分）が客体（自然）を操作する）」という主客分裂的な世界観がベースとして存在するという。

このような世界観は、生物学者の福岡（2020）³⁾に依拠するなら「ロゴス的思考（論理と思考によって自然や物事を明確化し、矛盾がない方向へと解釈する思考）」と換言することもできる。福岡（2020）³⁾は、こうしたロゴス的思考に基づく立場を「自然は完全に人間の理性の中で暴かれていて、その隠れなさゆえにすべてが理解し尽くせると考える立場」と表現する。これは、すなわち自然を制御可能と捉える立場そのものである。すなわち、過度な【ロゴス観】が【災害制御可能感】を強めるという見立てはじゅうぶんにあり得ると考えられるのである（関連 A と呼称）。

また、及川（2023b）⁴⁾が指摘するように、自然を制御可能と捉える立場は、同時に、「危機は回避できる（ゼロリスク社会は可能である）」という認識と親和的であ

り、防災行政をはじめとしたいわゆる専門家のふるまいに対しては、それを確実に実行すべき機関としての責務（無謬性）を要求する姿勢へとつながり易いことは想像に難くない。すなわち、過度な【防災行政無謬性信仰】が【災害制御可能感】を強めるという関係性についてもじゅうぶんにあり得ると考えられるのである（関連 B と呼称）。

なお、福岡（2020）³⁾は同時に、【ロゴス観】と対極を為す主客未分的な世界観、自然や物事の矛盾や相反する点を許容する「ピュシス的思考」に基づく立場の重要性を強調する。すなわち、【ピュシス観】が【災害制御可能感】の払拭に寄与する可能性も示唆される（関連 C と呼称）。

3. 仮説の検証

図-1 は、前述の関連 ABC および懸念ロジックの全体像を示したものである。懸念ロジックについては、【災害制御可能感】から【自身】への影響を関連 D として、【災害制御可能感】から【他者】への影響を関連 E として、それぞれ記している。これらの仮説を検証すべく、【災害制御可能感】【自身】【他者】【ロゴス観】【防災行政無謬性信仰】【ピュシス観】の計 5 つの潜在変数を構成するための観測変数を設問とするアンケート調査を表-1 に示す要領にて実施し、共分散構造分析を行った結果（標準化係数）を図-1 に併記する。モデル全体の適合度（GFI, AGFI, RMSEA）は良好であるといえる。

これによると、【災害制御可能感】の原因として想定されたもののうち、【防災行政無謬性信仰】から延びるパス係数（関連 B）と【ロゴス観】から延びるパス係数（関連 C）がそれぞれ統計的に有意な関連性として見出されており、強い【ロゴス観】と強い【防災行政無謬性信仰】が過剰な【災害制御可能感】につながっている可能性が高いといえる。【災害制御可能感】の払拭には、【ロゴス観】と【防災行政無謬性信仰】の低減が重要な意味をもつことを示唆する結果といえよう。

なお、残る【ピュシス観】からのパス係数（関連 A）については有意な関連性は見出されなかった。【ロゴス

キーワード：災害制御可能感，ロゴス観，ピュシス観，防災行政無謬性信仰

連絡先：〒350-8585 埼玉県川口市鯨井 2100 東洋大学理工学部都市環境デザイン学科, Tel: 049-239-1407, E-mail: oikawa053@toyo.jp

観)と【ピュシス観】は対を為す概念ではあるが, これらが【災害制御可能感】に及ぼす影響は必ずしも対を為すとは限らないようである.

他方, 懸念ロジックのうち, 【災害制御可能感】から

表-1 調査実施概要

日時	2023年10月26日~30日
方法	Webアンケート
対象者	日本在住の男女年齢階層別
回答数	1078票(20歳代/30歳代/40歳代/50歳代/60歳以上, 年齢階層別かつ男女別で各100票以上), 有効回答877票
<主な設問手順>	
<p>(1) 仮定の洪水災害の想定条件として, 「あなたの自宅は, しっかりとした堤防に囲まれた河川の, 周辺に広がる地域に属しています. あなたが自宅周りの洪水ハザードマップを確認したところ, 上記の河川が氾濫してしまった際, 自宅を含め地域一帯に数mの浸水被害予想が示されていました. 」と提示.</p> <p>(2) 上記想定下における【災害制御可能感】【自身】【他者】【ロゴス観】【防災行政無謬性信仰】【ピュシス観】度合いを測る設問を, 図-1の各観測変数の示す通りの内容に対し, 4段階の順序尺度(4: そう思う~1: そう思わない)で質問.</p>	

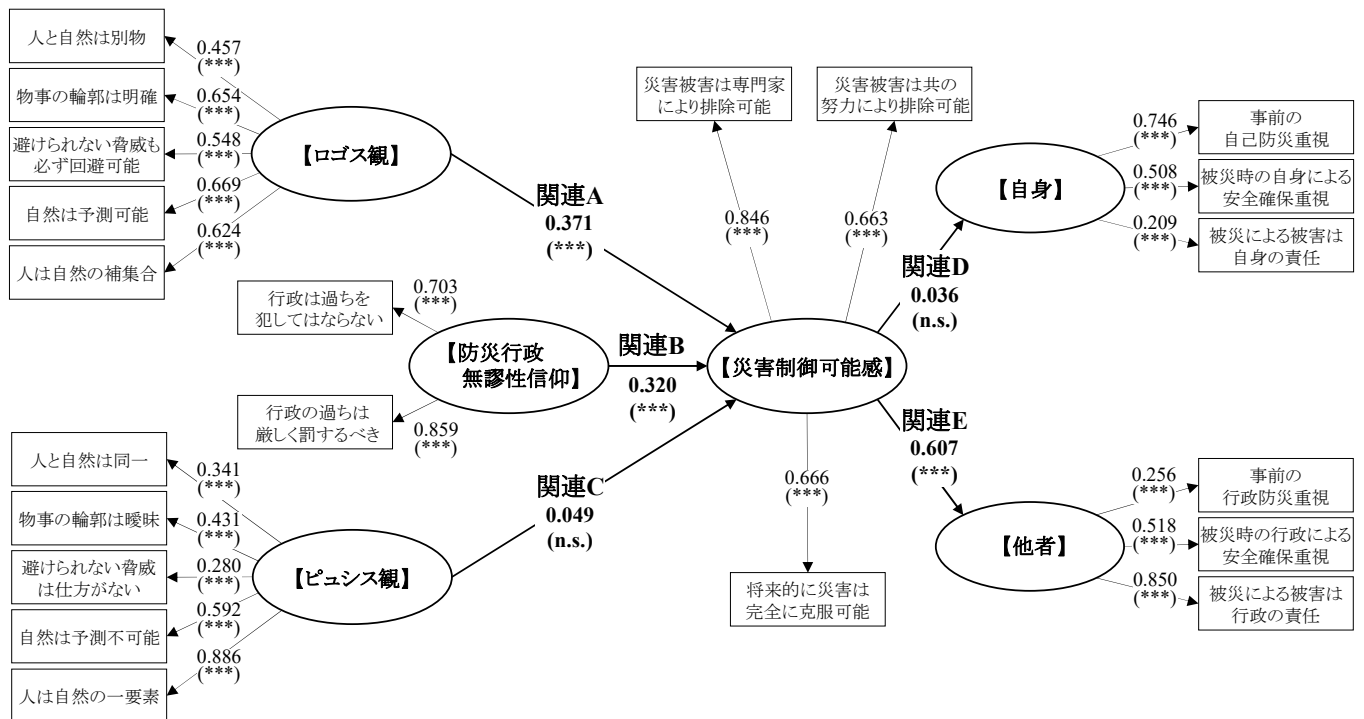
【他者】へ延びるパス係数(関連E)は統計的な有意性が示されたが, 残る【自身】へ延びるパス係数(関連D)については有意な関連性は見出されなかった. こちらについても, 【自身】と【他者】は対を為す概念ではあるが, これらが【災害制御可能感】から受ける影響は必ずしも対を為すとは限らないようである.

4. 今後の展望

本稿の検証は災害の想定として洪水災害のみにとどまっているが, 他の災害についても当てはまるのか否かも検証すべきである. より汎用に, 他の災害においても同様の結果が認められれば, 災害への備えに関する住民の主体性の醸成に向けて, 重要な鍵が見えてくるといえよう.

参考文献

- 1) 片田敏孝: 避難学確立に向けた議論のリフレーミング, 災害情報, No.18-2, pp.141-144, 2020.
- 2) 及川康: 災害制御可能感がもたらすもの, 日本災害情報学会第26回学会大会予稿集, pp.17-18, 2023.
- 3) 池田善昭・福岡伸一: 福岡伸一 西田哲学を読む 一生命を巡る思索の旅, 小学館, 2020.
- 4) 及川康: 防災の責任の所在に関するコミュニケーション, 日本災害情報学会第27回学会大会予稿集, pp.35-36, 2023.



(共分散構造分析, ***: $p<0.001$, **: $p<0.01$, *: $p<0.05$, n.s.:not-significant, GFI:0.934, AGFI:0.901, RMSEA:0.059)

図-1 災害制御可能感をもたらす要因とその影響に関する共分散構造分析結果パス図